

茜色の歌姫



第六部 壬申の乱



壬申の乱（想像模型）

是^{すめらみこと}天皇、高市皇子に謂^{かた}りて曰^{のたま}はく、「其^それ近江朝には、左右大臣、及び智謀^{かしこ}き群臣、共に 議^{はかりごと}を定^なむ。今朕^{われ}、與^{とも}に事を計^{はか}る者無し。唯^い幼^{いとけなくわ}か、少^こき孺子^{こども}有^あるのみなり。奈^{いか}之何^{かに}かせむ」とのたまふ。皇子、（中略）奏言^{もう}さく、「近江の群臣、多^{おほ}なりと雖^{いふと}も、何^{なに}ぞ敢^あえて天皇の靈^{みかげ}に逆^{さか}らむや。天皇独^{ひとり}りのみましますと雖^{いふと}も、臣高市、神^{あまつかみ}、祇^{つかみ}の靈^{たま}に頼^より、天皇の命^{いのち}を請^{まか}けて、諸

将を引率て征討たむ」(中略) 天皇誉めて、手を携り背を撫でて(中略) 鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまう。

(『日本書紀』卷第二十八)

第四章 飛鳥制庄 672

大海人皇子が鈴鹿の山を越え、三重に入った六月二十六日、飛鳥の留守司である高坂王のもとに、近江より穂積百足が三十の兵を随れて訪なってきた。

「大友皇子よりの詔である」

広間の上座に就いた高坂王だが、立ったまま木簡を読み上げる穂積百足に、まずは拝礼しなければならぬ。

「戸籍に抛りて、諸々の邑里より、正丁三人に一人を兵として懲すべし」

正丁とは、二十一歳から六十歳までの健やかな男をいう。諸国から兵を徴して飛鳥に集めよ、というのである。

「三人に一人……」

高坂王は眉根を蹙めた。一月もすれば、稲の刈り入れが始まる。さらに、兵の武備や糧秣は、すべて自弁となる。邑々にとつて極めて重い賦課となるだろう。

「兵を調うるに、いかほどの時を……」

木簡を渡して坐した穂積百足に、高坂王は問うた。

「し得るかぎり疾くせよ」

権高に告げる百足の髭面に、高坂王は苦いものを呑んだような面差しを禁じ得なかった。

興兵使者として大友皇子の詔を伝えるだけの役目にもかかわらず、大友皇子の御稜威を背負い、かつては百済の王族であった高坂王を見下すような振る舞いであった。

百済では、高坂王は大友皇子の父である豊璋王子よりも、百済王位に近かった。唐と同盟した新羅の侵攻で百済王家のひとつとびとの多くが長安に随行かれ、たまたま大和にあって難を免れたが故に、この地で天皇の御位に即いた。そして百済ではより上位にあった高坂王は、王都である近江から体よく追われた。

しかも飛鳥は、かつて天皇が大王と呼ばれていた頃を懐かしみ、近江に抗う豪族どもが蝟集する難治の地。

「どのように急いても……」

高坂王は言った。

「まず一月」

「一月？」

百足は声を荒げた。大海人皇子が不破に入ったとの報せは届いていないが、いずれにせよ、交わりの深い東国へと逃げたことは間違いない。その東国の豪族どもが不穏な動きを見せていることは、近江でも承知している。

そもそも、吉野にあった大海人皇子を取り逃がしたのは、留守司である高坂王ではないか。百足は怒気を含んで言った。

「すぐにも使者を發し、十日の裡に調えるべし」

「十日……」

息を呑む高坂王に、百足は頷いた。

「然り」

そのための戸籍ではないか、と百足は付け加えた。諸々の豪族どもを介して徴していた兵を、今や戸籍によって内裏が直に調えうる。速やかに軍乱に処することが可能になったのだ。

……愚かな。高坂王は胸の裡で呟いた。小豪族や民が近江の威に服してなどいないことを、内裏に近い者ほど知らぬと見える。

「吾は、そのために近江より派された」

百足はさらに、しばし飛鳥に留まり、諸処をめぐり、徴兵を監視する、と付け加えた。

「この宮の一屋を貸したまえ」

しばし後、穂積百足は十名ほどの兵を連れ、飛鳥の裡を巡察するとして河辺宮を發った。高坂王は己が寝屋に入り、息を吐いた。

百足は去ったが、広くもない河辺宮の庭には、未だ数十の兵が屯している。憚ることなく喚き、笑う彼等の声が、ひどく耳障りであった。

兵まだが、近江の威をかさに、吾を侮っている……。文武の才を称えられる大友皇子への妬みが、暗い澱みとなって高坂王の心の裡に沈んでいた。

「誰か！」

高坂王は伴部を呼んだ。

「女婦に酒を運ばせよ」

酒に酔い、女とまぐわう。まずは、不快を払いたかった。

百済人が……。

胸の裡で毒づきつつ、穂積百足は馬をゆつくりと駆けさせた。

なんの才もなく、ただ滅びし百済の王族であるというだけで官を与えられ、職に励まず無為に日々を送るだけの男。

十日で、兵を徴することが無理であることは、百足も心得ていた。嚇さねば動かぬ高坂王ゆえにあえて難事を負わせたのである。

いざとなれば、難波にある阿倍比羅夫率いる水軍の二千の兵を陸に揚げればいい。蝦夷や三韓で戦を重ねた精兵二千があれば、軍乱を鎮めるは易い……。

すでに、大海人皇子が鈴鹿を越えて三重に入り、千の兵と合流し、尾や濃では皇子に味方する兵が二千を越えて待ち受けていることを、穂積百足は知らない。大海人皇子が、伊賀を越えて東国に入った事の重みを、近江方は悟っていなかった。

不意に、背後から馬蹄が響いた。振り向くと、一人の官人らしき男が、馬を寄せてくる。

「誰か？」

百足が怒鳴ると、男は馬を降りて拝跪し、名乗った。

「飛鳥留守司に仕え奉る坂上熊毛」

告げたきことあり……。声を潜めた熊毛を、百足は不審そうに見つめた。熊毛は、腰に提げた長剣を外して地に置き、さらに乞うた。

「何とぞ、聴きたまえ」

百足は馬を降りた。熊毛はその耳に口を近づけた。百足は驚き、問うた。

「高坂王が謀叛を……、まことなりや？」

「然り」

「その証は？」

「吾が家に蔵してあり」

しばし後。

河辺宮に戻った穂積百足は、高坂王に告げた。

「やがて近江より、さらなる興兵使者が、兵五十を率いて来る」

高坂王が、それは如何なる故に……と問おうとすると、百足は続けた。

「河辺宮にては、それだけの兵は収められまい」

宮なり寺なり、適当な地はないか、と言われ、高坂王は貌を顰めつつ、小墾田の兵庫ならば、と告げた。河辺宮よりも二里（約一キロメートル）ばかり北にある。七十年の昔、炊屋大王が住まうた小墾田宮は、今は甲冑や剣、矛、弓矢や兵糧を収める兵庫として使われている。飛鳥留守司の差配するなかで、他に手広き屋はない。より広壮な岡本宮はすでに打ち捨てられ、井の水すら涸れていた。

「では、すぐに小墾田へと遷る」

せき立てられたように、すべての兵を随って去っていった穂積百足を、高坂王はあきれたように見送った。

翌日、穂積百足は河辺宮には現れず、高坂王は、庫より戸籍を出させ、各邑より徴する兵の数を算させた。

その翌日の二十八日。名張、伊賀で近江から派された官人が殺され、郡司が兵を随れて大海人皇子とともに東へと向かったとの報せが飛鳥にもたらされた。高坂王は、伴部を一人、小墾田宮に走らせた。穂積百足を呼び、今後の策を練るためである。だが、駆け戻ってきた伴部は、青ざめた面差しで報せた。

「小墾田の兵庫は、すでに二百数十の兵に満ちてあり」

二百数十……。高坂王は驚いた。百足は、新たに五十の兵が来ると言っていた。百足の兵と合わせても八十ほどのはず。

伴部は続けた。前から小墾田の兵庫を守っていた兵に見知った者があり、密かに問うたところ、昨日、穂積五百枝、物部日向といった豪族どもが、各々の兵を随れて集まってきた、庫を開かせ、矛や劍、武器を出させたという。

まずは留守司に報せねばと、高坂王の伴部は、百足には会わず、河辺宮に還ってきたのである。留守司たる吾の赦しを得ず兵庫を開けるとは……。怒りに四肢を震わせた高坂王は、ふと、貌を青ざめさせた。

もしや……。近江の意とは、穂積らをして吾を討たしむることでは。百済にいた頃より、高坂王は、大友皇子やその父なる豊璋王子とは不仲であった。軍乱の兆しに事寄せ、高坂王を誅殺しようとの謀ではあるまいか。

「坂上熊毛をこれへ」

高坂王は、もつとも信頼する伴部を呼んだ。やがて現れた坂上熊毛に、疾う、小墾田の兵庫へ行き、穂積百足に会え。何故に多くの兵を集め、兵庫を開かせたかを問え、と命じた。

熊毛は拝礼して去り、高坂王は、己が寝屋に入り、女孀に酒を運ばせた。大事が起こったとき、小さな高坂王は、策を講ずるのではなく、誰にも会わずに引き籠もり、酒を飲む癖があった。

やがて、寝屋の戸が叩かれた。

「酒か？」

「然り」

愛らしい声が還ってきた。入れ、と命ずると、齡は二十ばかり、ふつくらした頬の女孀が、瓶と杯、土器に盛った木の実を運んできた。

初めて見る貌であった。

「汝はいつ……」

目の前に瓶や杯を並べる女孀の、まろやかな腰のあたりを見つめつつ、高坂王は問うた。

「この宮へ上がった」

「今日」

にっこりと答える女孀に、高坂王は上唇を舐めた。色白の、肉豊かな乙女は、高坂王の好みに合った。

「いづくの邑より来た」

「箸墓」

「箸墓？」

「然り」

こちらを向いて笑った女孀の手が伸び、高坂王の股間を掴んだ。鋭くふぐりをひねり上げられ、高坂王は眼を見開き、四肢を強張らせた。続いて鼻柱に重い衝撃を受けた。拳で鼻梁を砕かれ、頭の裡に血が溢れ、高坂王は意識を失った。

その頃。

河辺宮を出た坂上熊毛は、小墾田宮には向かわず、南へと馬を走らせた。ミハ山、と呼ばれる小高い丘があり、その麓に、小さな苦屋とまやが建っている。

坂上熊毛は、辺りを見回しつつ、苦屋に入った。

「し得たるか？」

問うたのは、土蜘蛛の繭環まゆわであった。坂上熊毛は頷いた。

「されば……」

繭環は振り向いた。その背後に、大伴吹負おほとものふけいをはじめ、大海人皇子に心を寄せる小豪族どもが十数人、甲冑を着込んで居並んでいた。彼等は頷きあい、苦屋を出で、樹々の生い茂る丘を登った。緑の樹の合い間に、矛、剣を携えた兵どもが夥おびただしく潜んでいた。

高坂王が苦しい眠りから覚めたのは夕方であった。まず、目に飛び込んできたのは、さきほど、ふぐりをひねった女孀であった。

「汝は……」

治まらぬ股間の痛みに呻く高坂王に、女孀は笑った。

「やがて、五百の兵がこの宮を囲む」

「五百……穂積のか……？」

「否」

女孀は首を振った。

「抗あらがうなかれ、抗おうにも、伴部どもは皆、汝と同じく、容易たやすくは動けぬ」

喉を鳴らして笑い、女孀は窓を開け、高坂王の髪を掴んで立たせた。悲鳴をあげる高坂王の貌を、窓の外へと向けた。

中庭に、十数人の伴部が倒れていた。皆、股間を両手で押さえ、立つこともできないでいる。

さらにそこかしこに、同じく急所を攻められて悶え苦しむ伴部が転がっていた。

「吾、一人にて」

言葉もなく眼を見開いている高坂王の耳元で、女孀は囁ささやき、笑った。高坂王は激痛と恐怖に震えた。一人で、あれだけの数の男どもを……。

「汝は……」

高坂王は再び問うた。

「誰ぞ……？」

「重ねて言う」

女孀は応えず、高坂王の両の肩を掴んでこちらを向かせた。

「抗うなかれ」

股間に膝を叩きつけられ、高坂王はしおれた紙のようにくずおれた。
女嬬——土蜘蛛の葉耶は、静かに去っていった。

翌二十九日。

小墾田にある穂積百足は、弟の五百枝をはじめ、配下を集めて告げた。

「五百枝よ、汝は兵を率い、河辺宮にある高坂王を捕らえよ」

五百枝は頷いた。百足と五百枝が率いる穂積の兵は百余。河辺宮にあるは伴部が二十数人にわずかな女嬬のみ。たやすく、事はなしえよう。

一昨日、百足は、留守司の官人として河辺宮に出入りする坂上熊毛なる者から、高坂王が大海人皇子に宛てた木簡を見せられていた。即ち、高坂王は大海人皇子に組みし、近江に叛心を抱いている。百足は、兵に木簡を持たせ、近江に派した。近江からは、高坂王を捕らえよ、との命令が、その日の朝に届いた。高坂王に代わり、百足を留守司に任ずるとの詔も添えられていた。

「抗えば、殺せ」

百足はそう言い、五百枝は薄く笑って河辺宮へと向かった。

河辺宮の門を押し破って雪崩れ込んだ兵どもは息を呑んだ。

前庭に、二十数人の伴部どもが後ろ手に縛られ、転がり悶えていた。

「これは……」

穂積五百枝は呻き、一人の伴部の胸ぐらを掴んで質した。

「如何なる事ぞ！」

女嬬が……。伴部は呻いた。

「女嬬？」

伴部は頷いた。

「然り……見知らぬ女嬬が一人……」

「ただ一人の女嬬に、汝等すべて打ち負かされたというのか？」

五百枝は声を荒げた。

「偽りを言うな！」

苦しみもがき、涙を流しつつ首を振る伴部を地に叩きつけ、別の伴部を質した。

「高坂王はいづくに？」

「寝屋に……」

五百枝は、三人の兵に、共に来よ、と命じ、残る兵には、門を堅く閉ざし誰も入れるな、と告げ、宮の奥へと進んでいった。

宮の裡は、深閑と静まりかえり、物音ひとつなかった。

三人の兵を伴い、奥深く進み、寝屋の扉に手をかけた穂積五百枝は、不意に、背後の兵の呻きを聞いた。

振り返って見ると、一人の兵が、股間を両手で覆い、面差しを歪めて床に膝を突いていた。その背後から、葉耶が、残る二人の兵に飛びかかった。

二人の兵のふぐりは、葉耶の左右の手に掴まれ、捻り上げられた。さらに右足が跳ね上げられ、つま先が誤らず、五百枝の股間に叩きつけられた。

瞬く間に打ち倒されて悶える四人を見下ろし、葉耶は愉しげに笑った。

「穂積の兵どもよ！」

不意に上から降りてきた女の声に、前庭に屯していた兵どもが、一斉に眼差しを上げた。

見れば、前庭の隅に設えられた高樓の手すりから、穂積五百枝が、甲冑も衣も剥ぎ取られ、逆さに吊り下げられていた。よく見れば、五百枝のふぐりの根は堅く荒縄で縛られ、びんと張った縄の先は、手すりに結わえられている。

すなわち、五百枝を落下させずにいるのは、ふぐりを縛った縄一本。陰囊が伸びきり、赤黒く腫れ上がった二つの肉塊は、今にも破裂しそうであった。

女孀姿の葉耶が、手すりにもたれ、兵どもを見下ろして笑っていた。

「汝等が主を死なしめたくなければ、疾う、兵器を棄てよ！」

葉耶の声に兵どもは、青ざめた貌を見合わせた。兵の長らしい男が合図し、いつせいに剣や矛を投げ捨てた。さらに葉耶は、棄てた剣や矛を一カ所に積み上げるよう命じた。兵どもは随った。

葉耶は満足げに頷き、苦しみに貌を歪め、涙を流す五百枝に言った。

「疾う、兵を随れて飛鳥を離れよ。随わねば、汝が命はない」

必死に頷く五百枝に、葉耶は続けた。

「土蜘蛛が、汝から眼を離すことはない」

言うなり、高樓から飛び降り、いづくかへと駆け去った。兵どもが弾かれたように、つるされた主を救うべく、高樓の階梯を昇った。

その頃。

小墾田の兵庫は騒然としていた。

「如何した！」

屋から出てきた穂積百足は怒鳴った。

「敵が……」

配下の物部日向が応えた。

「敵？」

「物見が、夥しい数の兵がこちらに迫ってくる……」

「どけ！」

穂積百足は、右往左往する兵どもを突き飛ばし、自ら高樓に昇った。

北から、南から、東から……。長い隊列を組み、小墾田に向けて迫っている。それぞれ数百ずつ……合わせれば、千は越すだろうか。

甲冑はみすぼらしく、兵器も揃っていない。粗布を棒にくくりつけただけの旗幟。

高坂王の軍か？ 百足は疑った。まさか、あの無能な百済人が、大和の小豪族どもをまとめ、あれだけの軍を編んだとは思えない。そういえば、河辺宮に派した五百枝からは、なんの報せも

ない……。そもそも、あの坂上熊毛なる者が見せた、高坂王から大海人皇子に宛てた木簡は、まことであつたのか？ 五百枝に百の兵をつけて河辺宮に派したため、今、兵庫に屯する兵士は百五十余にすぎない。

しかし今は、思案に捕らわれている時ではない。五百枝とその兵を呼び戻さねばならぬ。

「日向！」

百足は、物部日向を呼んだ。階梯を昇ってきた日向に、疾う、使を河辺宮に走らせ、五百枝とその兵を還せ、と命じた時、その河辺宮の方より、一人の兵が馬を走らせて門前に駆け寄せた。

「吾は、穂積五百枝の兵なり。穂積百足はいづくに！」

そう告げる兵に、百足は高樓から叫んだ。

「吾は、ここにある。五百枝は如何した！」

「深く傷を負いし故、今より、近江へ退く！」

確かに伝えたり。兵はそう叫び、馬首をめぐらせ駆け去った。

高樓で突つ立ったまま、穂積百足は呆然となつた。

何が起つたのか……。子細は分からぬまま、弟の五百枝は百の兵とともに去り、百足は、百五十余の寡兵とともに、攻め寄せる千余の兵のなかに取り残された。

百足は怯えを覚えた。高坂王独りが叛いたのではない。大海人皇子に心を寄せ、近江に抗おうとする者どもが、大がかりな軍を興したのだ……。

「日向！」

百足は叫んだ。拝跪する物部日向に、こう命じた。

「汝は、大市八坂とともに、難波へ赴き、難波の津にある阿倍比羅夫に会い、助軍を乞え」
高樓より見れば、難波へと通じる西への道に、敵軍の姿はない。物部日向と大市八坂は、馬蹄を轟かせて門より駆け出でた。

難波へは、舟で水路を行く方が速いが、川の津という津は、敵に押さえられていた。やむなく二人は、馬を走らせた。陸路を難波へ向かうには、六十里（約30キロメートル）を走り、河内に至る。河内の駅家で馬を換え、さらに三十里（約15キロメートル）を走るか、あるいは、舟を使つて川を下るか、河内に至つてから決めるしかない。

物部日向と大市八坂は、飛鳥より三十里（約15キロメートル）を駆けた。道は、二上山に入る上り坂となる。二人はひとまず、山の麓で馬を休ませることとした。

人けのない沼を選び、馬に水を吞ませ、自らも汗を拭っていると、背後より人の声がする。

「近江より来れる方々なりや」

見れば、三十半ばと、十七、八、二人の女が立っていた。近在の民であろうか、長い粗布の真ん中に孔を穿つて頭を通し、腰を紐で結わえた貫頭衣をまとい、髪の毛を一つに束ねて馬の尾のように垂らしている。

「汝等は？」

物部日向が問うと、年かさの女が笑みを浮かべた。傍らの瘦せた乙女は、剛げな貌を臥せがちに黙している。

「まず、吾が問いに応えよ」

「汝がごとき賤が女に問われ、応える要なし！」
日向は歩み寄り、荒々しく女の肩を突いた。
「行くぞ」

大市八坂に声をかけ、踵を返すやいなや、突き飛ばされた年かさの女が走り寄り、背後より右の手を日向の股に差し入れ、ふぐりを掴んでひねりあげた。

日向は悲鳴をあげ、のけぞって総身を強張らせた。
驚いた八坂が腰の長剣を抜き、駆け寄ろうとしたとき、立ちふさがった乙女が、剣を構えた八坂の右腕を掴み、後ろ手に捻り上げ、その腰を蹴った。八坂は剣を取り落とし、前のめりに地に両手を突いた。

急ぎ振り向いた時、八坂の落とした剣は、乙女の手握られ、その切っ先が喉元につきつけられていた。

「汝等は、近江より派された穂積の配下であろう」

前屈みになり、涙を流して呻く日向のふぐりを握りしめつつ、年かさの女が八坂に問うた。

「大和の豪族どもの兵に囲まれ、難波にある阿倍比羅夫に助軍を乞いにゆく途次、違うか？」

八坂は青ざめ、唇を噛みしめた。この女ども、何故にそれを知るか……。八坂の心根を見透かしたように、女は続けた。

「吾等、土蜘蛛の知らぬ事等ない」

「土蜘蛛……」

呻くように八坂は言った。

「土蜘蛛は……すでに滅びたはず」

「滅びはせぬ」

年かさの女——繭環は言った。

「土蜘蛛が何故、吾等を妨げる？」

八坂の問いに、繭環は短く応えた。

「主が命ずる故に」

「汝等が主とは？」

「知らずともよい」

繭環は、日向の股間から手を離して突き飛ばした。日向は地に臥せ、細かく痙攣しつつ悶えた。

繭環は、もう独りの土蜘蛛——結奈を指した。

「是非にも難波に至りたければ、その乙女と戦え」

大市八坂は、焼けつくような痛みがこみあげる股間を両手で押さえ、地に坐し、呆然と目の前に立つ乙女を見上げていた。

兵器をとつても、素手でも、一度たりとも負けたことのない八坂が、齡十七、八、小柄で細身の乙女にいたぶられた。繰り出す技は、蝶のように軽やかに舞う結奈にことごとく避けられた。

やがて鳩尾に拳を入れられ、下肢を蹴られ、足の甲を踏まれ、ついにはふぐりに爪先を叩き込まれた。

結奈は、息一つ乱さず、薄く笑みさえ浮かべ、蒼白の面差しを震わせつつ怯える八坂を見下ろ

している。

「結奈よ」

繭環は、俯せて悶える物部日向の背に腰を下ろし、愉しげに言った。

「時が惜しい。そろそろ、仕舞え」

結奈は頷き、八坂の顎を蹴った。八坂は仰向けに倒れ、ぶざまに開かれた股間に、結奈は容赦なく踵を打ち込んだ。

八坂は絶叫した。結奈は、打ち込んだ踵をそのままに、股ぐらを踏みにじった。

潰される……。男でなくなるといふ恐怖がこみ上げ、八坂は女童のように泣き喚いた。

だが……。やがて下腹より快樂が湧き上がってきた。結奈は、足の裏で、袴の上より、巧みに八坂の陽物を撫でていた。激痛と裏腹の愉悅に、八坂はやがて眼を閉じ、喘ぎ始めた。

結奈の足技を見つめつつ、繭環は笑みを浮かべた。

ふぐりを蹴られることは、男の自負をも打ち砕く。辱められ、耐え難い苦痛を味わわれ、もはや抗う気をも奪われた挙げ句、快を与えられた男は、もはや魂を喪い、如何なる命にも随う。

それもまた、土蜘蛛の技であった。

「汝にもしようかの」

繭環は、物部日向の脇腹を蹴り、仰向けにしてその股間に足を乗せた。

やがて――。

二人の土蜘蛛により精を迸らせしめられ、二人の男は惚けたように地に坐していた。

「されば結奈、吾は飛鳥へ戻る」

結奈は頷き、繭環は続けた。

「汝は、彼等を随れて難波へ、後は手はずのままに」

小墾田の兵庫は、千余の兵によつて隙間なく囲まれていた。彼等の多くは、眦をつり上げ、息を弾ませ、次なる命の下るのを待ち受けていた。

兵どもからやや離れ、將軍に推された大伴吹負が、三輪高市麻呂、荒田尾赤麻呂らと喧しく談じあつていた。皆、大海人皇子に味方する小豪族どもである。

「如何した？」

音もなく傍らに立った繭環の声に、大伴吹負は面差しを強張らせ、豪族どもは俯き、眼を逸らした。吹負は告げた。

「兵庫に籠もつた百五十余の兵、そのほとんどは吾等に降つた」

「穂積百足は？」

「未だ降らず、十余の兵とともに、あれに」

吹負の指さす先は、中庭に聳える高樓であつた。びしりと楯をめぐらし、その隙間よりつがえられた矢が覗いている。

「降れば赦す故、共に近江と戦うべしと説いたが、頑なに拒む。もはや、攻め入る他はなし」

「十余か……」

繭環は高樓を見つめて言った。

「されば、吾に任せよ」

駆け出そうとするその袖を、吹負が押さえた。
「汝に諮りたきことあり」

兵どもより一里（約500メートル）離れて、四隅に柱を立て、粗布で覆った幕舎が幾つか設えられていた。繭環を随れて、幕舎に入った吹負は、やや逡巡し、やがて口を開いた。

「大海人皇子は、軍となれば、汝等土蜘蛛の策に随うべしと命じたもた」

何故、今更そのことを……。繭環は首を傾げ、吹負を見つめた。

「汝等土蜘蛛の働きにより、吾等はここまで一兵も損なうことなく、留守司たる高坂王を捕らえ、近江より兵を随れ来たった穂積百足を追いつめた。されど、豪族どもの裡には、軍が果てるまで、一度も敵と干戈を交えることなく終わるのではないか、と憂うる者もいる」

「近江の兵と言えども……」

繭環は、怒りを押し殺して言った。

「徴された民であり、みだりに殺すべからず、大海人皇子は、そう命じたもうたはず」

「然り……」

吹負は唇を噛みしめて俯いた。繭環は続けた。

「さればこそ、吾等土蜘蛛は、敵であれ味方であれ、誰一人殺めることなく、飛鳥を制した」

「然り、されど……」

吹負は貌を上げ、懇願するように言った。

「このまま軍が果てれば、なんら功勳を樹ることなく、顕賞る事も少ない、と言う者も多い

故に……」

功勳……。繭環は、面差しも堅く、憤りを押し殺した。

未だ勝敗定まらぬ前から、顕賞を思いめぐらす。それでは、鉄の利ほしさに三韓に兵を派し、多くの者を死なしめた蘇我や巨勢、中臣ら大官じもと同じではないか。

たとえ軍に勝つても、土蜘蛛に与えられるは、ただ、安穩と生業をたてられるだけの小さな僻遠の地にすぎぬというのに……。

吹負は、言い募った。

「されば、ここは土蜘蛛に頼らず、吾等で攻めるべしと、多くの者が言う。吾一人の宰領では抑えられぬ。乞う、ここは吾等に、軍を任せたまえ」

「さらに……」

繭環は怒気も露わに、吹負の肩を掴んだ。

「女である吾等に随うは、快からぬのであろう！」

吹負の股間に膝を打ち込み、うづくまる吹負に背を向けた。

「さらば、汝等に任せる。千余の兵で十余の敵を、思うままに殺戮すればよい！」

そのまま幕舎を出た。

仰ぎ見れば、兵庫の高楼に立つ穂積百足の姿があった。唇を引き結び、諦めに似た澄んだ笑みを浮かべ、山々の青垣に囲まれた飛鳥の地を眺めている。

悲しみに胸をかきむしられ、繭環は去った。

その日の夕暮れ。

難波の津には、阿倍比羅夫が率いる百五十の船団が、旗幟をなびかせ、黒々と並んでいた。飛鳥より、難波から遠い近江に都が遷った後も、難波は、諸国より漕ぎ至る舟が行き交い、さかんに市が開かれ、前にも変わらぬ賑わいを見せている。

津に近く、かつて葛城皇子が住まうていた飯宮が、阿倍比羅夫の宿とされていた。蝦夷の地や三韓で戦い、日本最強と言われる二千の水軍を率いる比羅夫は、すでに五十八。髪も髭も半ば白く、深い皺が度重なる軍歴を示していた。

「されば……」

奥深い一屋で、比羅夫は並んで坐す物部日向、大市八坂に問うた。

「飛鳥は、すでに近江方が制した故に、吾等は大海人皇子を追い、紀の国に水軍を進めるべし。それが内裏の意なりと汝等は言うか」

「然り」

物部日向は応えた。

「皇子は紀にて謀叛の輩を集めるため、吉野を発したとのことなれば……」

比羅夫は凝つと、飛鳥から派されたという二人の使を見つめた。疲れもあるうが……。二人の瞳は、死魚のように臍に動かなかった。貌も青黒く、語る声音にも力がない。

「漁人どもより聞くに……」

比羅夫は言った。

「すでに大海人皇子は、紀ではなく、東の濃に入りて数千の兵を得、さらに飛鳥の諸豪族が留守

司に抗い、軍を興したとの風聞もあり」

大市八坂は面差しを強張らせ、物部日向を見やった。日向は重い口調で応えた。

「否。皇子は紀に向かった。飛鳥にても、二、三の豪族が河辺宮へ攻め寄せるも、すでに吾等が兵にて鎮めてあり」

「二、三の豪族とは誰ぞ」

二人はまたも、貌を見合わせ、日向が唇を震わせつつ応えた。

「大伴吹負に……」

「吹負が率いた兵は幾人か」

「それは……」

口籠もる日向に、比羅夫は傍らに置いた長剣の鞘を掴んで立ち上がった。

「汝等……」

日向と八坂は怯えて後ずさった。

「誰に命ぜられ、難波に来た」

比羅夫の右手が剣の束にかかった。鞘が払われ、抜き放たれた刃が宙を舞い、梁をかすめて天井に突き立った。

その梁から黒い影が舞い降りた。結奈が、短剣を構え、比羅夫の喉に突きつけていた。

「やはり……」

比羅夫は呻いた。

「汝等、土蜘蛛か……」

結奈は唇を噛みしめ、身を動かさそうとした。
その時。

「結奈、やめよ」

声が響いた。屋の扉が開き、鏡郎女が現れた。結奈は短剣を懐に収めて屋の隅に退いた。
「久しく」

軽く一礼する鏡郎女に、阿倍比羅夫は眼を見開いた。

「……生きてあったか」

「代わりに、左右の手を喪った」

微笑む鏡郎女に、比羅夫は声を荒げた。

「吾を欺こうとしたは、何故ぞ！」

「その二人……」

比羅夫には応えず、鏡郎女は結奈に命じた。

「随れ行け。解き放つてもかまわぬ」

日向と八坂は、なにやら物欲しげな面差しを、結奈に向けた。結奈は薄く笑い、顎を動かして立つように命じ、外へ出た。屋の裡は、鏡郎女と阿倍比羅夫の二人きりとなった。

「吾が……」

比羅夫が押し殺した声で言った。

「あのような浅はかな策に欺かれるとも思ってたか」

「汝が、どこまで知っているかを聞きたかった」

「近江よりの命が届けば、吾は軍を動かす」

息を整え、比羅夫は言った。

「すでに飛鳥は大伴吹負らに制されたと聞いた。吾が軍がその飛鳥に向かうか、あるいは皇子を追って東に向かうか、さらには、内裏を守り奉るため近江に向かうか、いずれにせよ、吾は近江の命に随うのみ」

「阿倍比羅夫は……」

鏡郎女は俯き、静かに言った。

「大王に忠実な將軍よ。たとえ百濟人が天皇を僭称しようとも、それは変わらぬのだな」

「変わらぬ」

「大友皇子が、唐と盟を結び、軍を興して新羅に派する意と知っても」

「命ぜられれば、再び海を渡る」

「新羅が減びし後、唐が海を越えて攻め寄せると知っていても？」

比羅夫はしばし口を嚙み、詰めた息を吐き出すように言った。

「吾はただ、命に随うのみ」

「大海人皇子は……」

鏡郎女は、瞬きもせず、比羅夫を見つめて言った。

「すでに濃にて天皇の御位に即いた」

比羅夫の眉根がかすかに動き、鏡郎女は続けた。

「大友皇子は、いまだ天皇を称制するのみ。されば、濃にある天皇の命こそ、詔。阿倍比羅

夫は天皇の詔に逆らうのか」

「……名乗りて天皇の御位に即けるなら、誰でもし得る」

「たとえ、幾多の民や豪族が、心を寄せる天皇であつてもか」

比羅夫は黙した。水軍を率いる比羅夫は、水路を往来して諸国をめぐる者どもに知己が多い。飛鳥でも、東の伊勢や尾、濃、西の吉備、播磨、筑紫、二名島……多くの地で、近江の大友皇子ではなく、大海人皇子の統べることを望む声が高まっていることは知っていた。されど……。

未だ、日本を統べるは、近江の大友皇子。その命に逆らうは、即ち謀叛。

「阿倍比羅夫よ！」

不意に鏡郎女は床に額ずき、声を搾りだした。

「何とぞ、大海人皇子に、この国を統べらしめよ！」

「何故に……」

阿倍比羅夫は、冷やかな面差しで問うた。

「汝は大海人皇子を援ける。まさか、大友皇子を廃し奉ることで、日本と、新羅や唐との軍を避けようとの意か？」

「そのこともある」

「汝は……」

比羅夫は声を震わせた。

「汝こそは、かつて宝大王や葛城皇子の側近くにあり、大和の政事を牛耳り、多くの兵を渡海

せしめ、多くの屍を三韓に晒したではないか！」

拳を握り締めて叫ぶ阿倍比羅夫に、鏡郎女は額ずいたまま、動かなかった。比羅夫は続けた。

「吾等が阿倍の兵、幾人か死んだと思うぞ、その汝が、よくぞ吾が前に現れ出でたるものかな！」

荒らかに、比羅夫は床を踏み鳴らした。そのとき、天上に刺さっていた比羅夫の長剣が床に落ちた。

鏡郎女の四肢が弾かれたように跳躍した。

比羅夫の眼前で、刃が煌めいた。すばやく身を引いたとき、鏡郎女が貌をあげた。

その口は、横真一文字に抜き身の長剣を啜っていた。剣の束は、阿倍比羅夫の右手のあたりに差し出されていた。

「それは……」

わずかに手を伸ばせば、長剣の柄を握り、鏡郎女を斬るはたやすかった。だが、まっすぐに比羅夫を見詰める鏡郎女の眼差しに、思わず問うた。

「何の意ぞ」

郎女が口を開き、剣は床に落ちた。比羅夫はすかさず、剣を拾い上げ、郎女の喉に突きつけた。

「斬りたいならば……」

唇が笑みをつくり、鏡郎女は背を伸ばして坐した。

「斬れ」

瞬きもせず、剣を擬したまま凝つと見詰める比羅夫に、鏡郎女は続けた。

「汝が言うとおりに、吾は多くの罪を重ねた。私恨を晴らすべく罪を重ね、その果てに配下に裏切

られ、左右の手を喪った。多くの男に姦されつつ生き延びた。ここで汝がごとき蒼れ高い將軍に誅さるるは幸いである。されど……」

再び額ずき、郎女は言った。

「吾が死して後、大海人皇子を援けたまえ。あるいは、大友皇子に随うとでも……」

あげた面差しが、涙に濡れていた。

「せめて、未だ近江にある額田郎女を……」

額田郎女？

その名に虚を突かれ、肩を震わせて涙を流す鏡郎女を不思議な面持ちで見詰めつつ、阿倍比羅夫は首を傾げた。

「何故に、額田郎女を？」

鏡郎女は口を動かさそうとして、声は嗚咽にかき消された。

その翌朝。

近江より馭馬が難波に着き、阿倍比羅夫を訪なつた。

「詔である」

近江より派された官人は、手にした木簡を読み上げた。

「大伴吹負、三輪高市麻呂、荒田尾赤麻呂、他に坂上、秦、佐味等の輩、軍を興し、飛鳥留守司を攻む。速やかに陸路、飛鳥へ至り、鎮めるべし」

「その詔は」

阿倍比羅夫は問うた。

「倭媛、皇后の詔なりや、それとも、大友皇子の命なりや」

「大友皇子の詔である」

「奇怪な」

比羅夫は、差し出された木簡を眺めつつ言った。

「天皇を称制したまうは、倭媛皇后。何故に、大友皇子が詔されるぞ」

「それは……」

応えようとした官人を制し、比羅夫は決然と言い放った。

「偽詔には随えず。吾は、近江にも即かず、大海人皇子にも味方せず！」

官人は倉皇として近江に還った。

南の飛鳥は大伴吹負らに制圧され、西の難波にある阿倍比羅夫は中立を宣し、東の不破には、大海人皇子のもと数千の兵が集って近江に叛旗を翻した。

近江は囲まれ、追いつめられた。そのことを、近江にある大友皇子は、まだ知らない。